

「第13回FDフォーラム」

場所：立命館大学衣笠キャンパス
期間：3月8、9日

栗原裕経済学部長のお勧めにより愛知大学から補助をいただいて、三月八日(土)九日(日)の立命館大学衣笠キャンパスでの財団法人大学コンソーシアム主催第13回FDフォーラム「大学教育と社会—FD義務化を控えて—」に参加させていただきました。

八日のシンポジウムは中村正氏(学校法人立命館常務理事 教学担当)、飯吉弘子氏(大阪市立大学 大学教育センター専任研究員)、滝紀子氏(河合塾 教育研究開発本部教育研究部長)をシンポジストとして行なわれました。中村氏は初年時教育から卒業研究までを一貫させてシンプルに体系化させたカリキュラムツリーに基づいて学びのコミュニティ作りを提唱されました。飯吉氏は産業界の要求と大学が育成しようとするものが近年接近してきていることを指摘し、問題解決能力、クリティカルシンキング、キャリアデザイン力を総合した自己思考能力の養成の必要性を主張されました。また自己思考能力の養成において実用とは一見かけ離れたリベラルアーツ(一般教養)を再評価すべきことも付言されました。滝氏は大学で育成したい学生のイメージを明確化しそれに基づいて教育目標や方針を設定し、各教員がカリキュラム・プログラムの意図を理解したうえで授業を展開されることを提案されました。印象深かったのは滝氏が青山学院経済、国際経済、早稲田政経、慶応経済の応用経済学の授業科目を比較し、同じ経済学部でも重点とするところに差異があることを具体的に示してくださったことです。翻って愛知大学としばしば比較される南山大学、名城大学、中京大学の経済学部の授業科目を愛知大学のものと付き合わせる作業は愛知大学経済学部のカリキュラム・プログラムの趣旨を理解するうえでも手助けになるのではないのでしょうか。

翌日九日は第5分科会「『学び』の心と初年次教育」に出させていただきました。龍谷大学理工学部長 四ッ谷晶二氏、金沢工業大学工学教育センター 青木克比古氏、京都教育大学教育学部 沖花彰氏が報告されました。それぞれ個別具体的な事例で特色がありましたが、共通して言えることは補習学習の組織化ということではないのでしょうか。補習指導には大学院生や予備校講師を用いて数学や英語の駆け込み寺やレスキュー部を大学の中に恒常的に設置して学生の利用に供するのです。愛知大学では四月より教育支援センターが本格的に活動を開始しますが、補習指導の体制作りはこれからの課題ではないのでしょうか。経済学では英語と数学の基礎力が重視されますが、愛知大学に入学する学生の中には普通科高校以外に商業高校、工業高校、農業高校の多様な出身校の学生がいます。様々な事情により出発点においてハンディキャップがある場合があります。補習体制の確立の必要性は強調しても強調しすぎることはないと思います。

帰宅後、シンポジウムで飯吉氏が言及され話題になりましたボイヤーの『大学教授職の使命』(有本章訳、玉川大学出版、1996年、原書は1990年)を愛知大学の図書館で借り出して読んでみました。大学教員の水平、垂直移動の自由化と大衆化した大学の類別化、そのための基準の重要性が説かれていました。今から二十年近く前に書かれた本ですが、今日のFD活動の取り組みには大事な本ようです。訳者の有本章氏は広島大学・大学教育研究センター教授であります。広島大学は全国的にFD活動に関する研究では牽引車的な働きをしている大学で、その成果が大学論集という雑誌に恒常的に発表されています。例えば、1996年度の第

26集には有本氏は「FDの構造と機能に関する専門分野の視点」という論文を載せておられます。このようなFD関係の専門雑誌に目を通すようにするのもFD活動に有益なのかも知れません。

なお、『大学教授職の使命』にはアメリカ社会学の碩学デビッド・リースマンの『大学革命』（国弘正雄訳、サイマル出版、1969年）も引用されておりました。国弘氏からわたくしはご高配を賜っており、ポイヤーの書に一層親しみを感じたことでした。

学部長	FD委員長	FD委員会	企画・広報課長	係